

# 地誌 武蔵野 台地

だむしらの  
いらしの

私たちが住む武蔵野台地は、東京都青梅市の方向から、狭山丘陵を越えて扇形に広がっていて、緩やかに下りつつ低地に移る。かつて秩父山地から流れ出ていた川によって運ばれた砂礫が現在の台地をつくった。

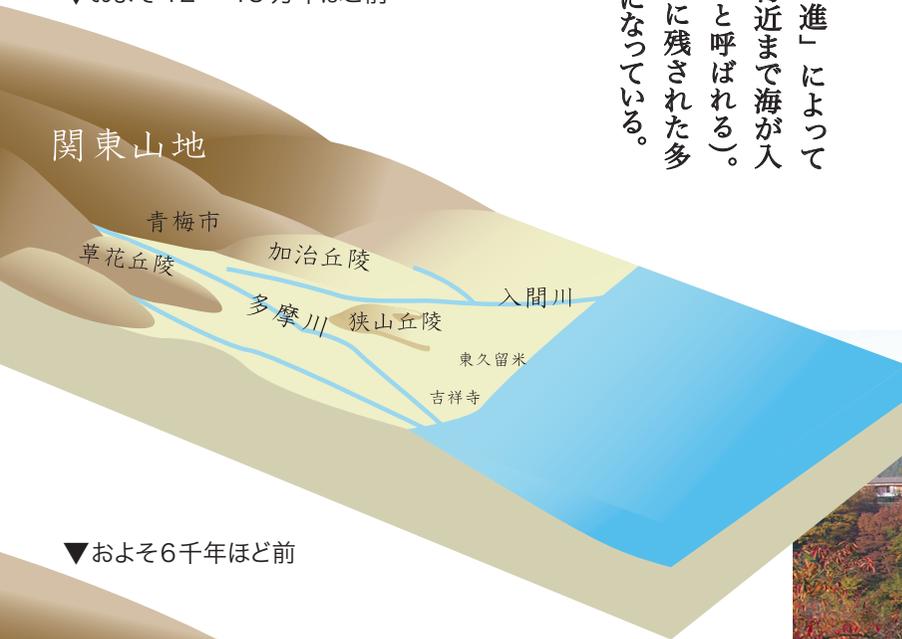
およそ200万年ないし50万年前の海岸線は、現在の海拔180m付近にあつて、青梅を要として扇状地をつくり、沖合にあつたいまの昭島には、アキシマクジラが生息していた。

その後海岸線は次第に東に後退し、およそ12〜13万年前になると、現在海拔50m付近にある吉祥寺、善福寺、東久留米を結ぶ線まで退いて、加治丘陵や草花丘陵が姿を見せた。

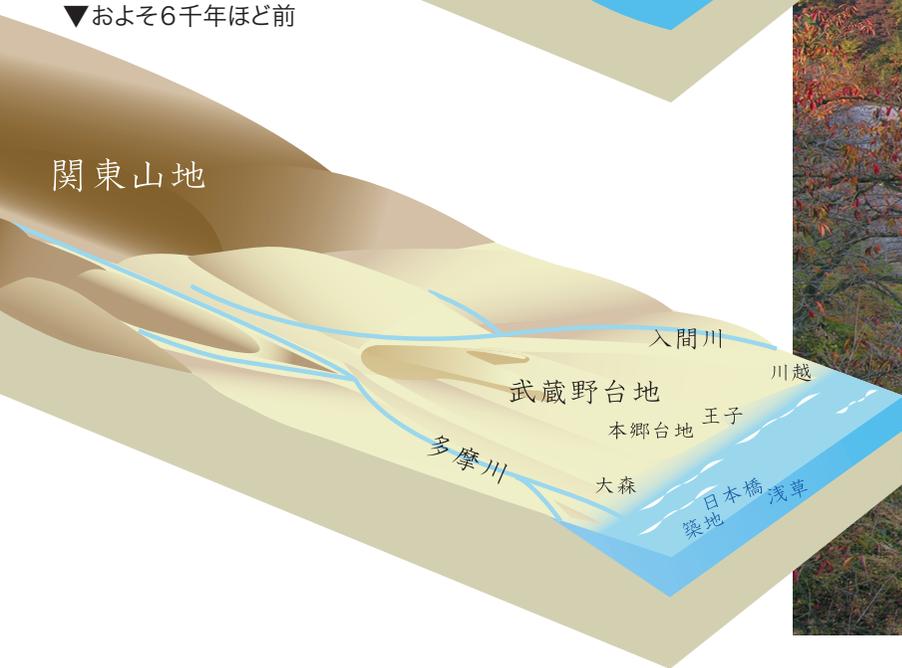
2万年前には、海拔がいまより100mも低くなつて海岸線はさらに沖合にあり、東京湾は陸地となった。地盤の隆起と当時の箱根山や富士山の火山活動による大量の火山灰が降り注ぎ、この火山灰は風化して関東ローム(赤土)となった。そして川の流れと地盤の隆起によつてつくられた河岸段丘を被つていった。

しかし6千年前の「縄文海進」によつて海岸線は再び北上し、川越付近まで海が入り込んでいった(「奥東京湾」と呼ばれる)。いまの新河岸川、隅田川沿いに残された多くの貝塚は明らかなその証拠になっている。

▼およそ12〜13万年ほど前



▼およそ6千年ほど前



多摩川上流(青梅市内)



▼縄文海進のころ

